

キャリア教育で学校を変える。教師が変わる。

「世のためたれ」の精神 今更そ、試される



福島県立福島高校
進路指導部 副部長

浜田伸一

はまだ・しんいち●1960年生まれ。國學院大學文学部卒業。足立区立第四中学校、福島県立磐城農業高校、石川高校、安積高校を経て、2010年福島高校に赴任。

文／堀水潤 撮影／渡邊力(P61を除く)

「10名帰宅できず。停電のなか本校に宿泊」「福高 避難所に指定」「側溝の放射線量高い値 立入禁止へ」「1年生 仮教室で1カ月経過」「仮設校舎着々と」…

今年4月から7月にかけて、立て続けに4回発行された福島高校(以下、福高)の校内新聞『梅章』号外の見出しだ。編集委員の斎藤航君(2年)曰く「未来への保存のため、記録性を重視した」というだけあり、詳細かつ具体的な記述からは当時の緊迫した様子が伝わってくる。

それから数カ月を経て、同校は日

常性を取り戻してきた。しかし、隣室の音が漏れるプレハブの仮設校舎での授業など、依然として支障は多い。放射線という目に見えない不安、危機感をおもる報道も生徒の心に影響を与えている。そうした「ハンデ」を言い訳に、子どもたちの進路実現の可能性をせざることは避けたい、というのが教職員の共通した思いだ。

SSH(スーパーサイエンスハイスクール)としての活動も盛んな、県下随一の進学校の生徒と教職員は、震災以降、何を考え、どう行動したか。国語科の教員で、進路指導部 副部長の浜田伸一が見聞きした同校の取り組みを、SSH担当教員らの証言を交えながら紹介する。

3月11日の6時間め、進路指導室で「経験したことのないほど大きく、長い揺れ」を体験した浜田は、揺れがおさまるや、数人の教員と共に、奥の4棟へと急い



だ。耐震診断でD判定、震度6で崩壊する可能性ありと聞かされていた古い校舎だ。渡り廊下の壁はところどころ崩落していたものの建物自体は無事だった。

その4棟で物理を教えていた原尚志は、地震発生の瞬間を鮮明に覚えている。

「緊急地震速報でしよう。授業中突然、生徒の携帯電話がいつせいに鳴りだしました。と同時に、大変な揺れに襲われたのです。左右に大きく振られる感じで、いっそうにおさまる気配はありません。『机の下で頭を下げていろー』そんな簡単に建物は壊れないから」と言っているそばから、バシッという音とともに壁に亀裂が入ったときは、さすがに恐ろしくなりました」

揺れがおさまり、校内放送が入ると、生徒は雪の降る校庭へと避難した。

「騒いではいましたが、バカ騒ぎとかではなく、迅速に落ち着いて行動していました」と、そのときの様子をふりかえるのは阿部翔太君(3年)。原らの指導のもとプラズマの研究を進め、学会など大舞台でも物怖じせず発表する生徒だ。

教職員による状況把握と安全確認後、帰宅できる生徒は速やかに帰宅し、自力での帰宅が困難な生徒は余震が続くなか保護者の迎えを待った。

結局その日は10人の生徒の帰宅がかなわず、管理職および教員数名が学校に残った。郡山から新幹線で通勤していた浜田は同僚の車に4人で同乗し、大渋滞のなか家路を急いだ。

「やまと帰宅したところで電気も水も不通です。自然災害になじみのない土地だけに、こんなことが実際に起こるのかと不思議な気分でした。そんなところに飛び込んだのが水素爆発のニュースです。大変なことになった、これからどうなるのかと不安になりました(浜田)

だからといってなす術はない。二人の子どもを妻の実家に預けるため、新潟まで車で連れていき、東京行きの新幹線に乗せることが親としてできる最低限のことであった。その間も、福高周辺では大変な毎日が続いていた。震災翌日に体育館が県の避難所に指定され、市内在住の教員を中心に対応に追われていたのだ。

国公立大学の後期試験も、中止や延期など混乱した。「受験後、現地の親戚宅に滞在した生徒や、奥羽本線で迂回して帰宅した生徒もいました。かわいそうなのは、後期試験にかけていたのに受験機会を失った生徒です」と、進路指導部長の神田亮は残念そうに話す。

浜田が震災後初めて学校へ向かったのは3月16日だ。臨時の高速バスを待つ長蛇の列には、雨でもないのに雨合羽や長靴、マスクで身を固めた人が多かった。

その日は、延期されていた県立高校の入試合格発表日。合格を喜ぶ中学生の表情を見たとき、浜田は「人感していた。」「こんな状況下でも明るい生徒の姿を見るにつれ、この子たちを何とかしなければと思いましたし、われわれ大人がどこで誤ったかを伝えていく必要があると感じました。原発のある県に住みながら、また科学と倫理の問題を認識しながら、効率や利潤を優先してつくられたシステムを過信し、安全だと信じていた、あるいは信じたふりをしていたことに、大人として強い責任を感じました」

いっぽうの新入生は、その日、何を感じていたのであろう。不急の外出を避け、電話で合格を確認した影山豪大君は言う。「SSHに興味があり、何としても福高に入りたかったため、もちろんうれしかったです。ただ、そばで母と妹が泣きだして

てしまったときは、おろおろしてしまいました。母が言うには、震災と原発で失意のどん底にあるなかでよく合格したという喜びとともに、合格できたのはいいけれど、いったいこの先どうなるのだろうかという不安。この両方の感情がまざり、気持ちがあたふたらしいのです。自分のことを深く考えてくれている家族の存在をうれしく感じるとともに、親も強いわけではないので、いざというときは自分が家族を守らなくては、なんてことを無力ながら考えたりしていました」

放射線という見えない恐怖

それから始業式までの約1カ月、教員それぞれに生徒の状況把握や新年度の準備が進められた。県教委の決定で人事異動が延期され、4月に入っても前年度と同様の体制で臨めることは現場としてはありがたかった。浜田は、全国の教員仲間から届く励ましのメールをプリントアウトし、進路指導室の前に掲示した。

「学校再開のめどがたたない時期でしたが、みんなが応援してくれていることを早く生徒に伝えたい一心でした」

そうした校務に加え、大きなウェイトを占めていたのが、第1・2体育館あわせて最大で500人が生活した避難所の運営だ。なかには、避難してきた市民に



何のために学ぶのか。 自分の力を、どう 社会に生かすのか

つた。だが、避難所の運営で精いっぱい
の教員に生徒を組織する余裕はなく、ボ
ランティアを希望する場合は市役所で
登録をするよう促していた。原は言う。
「われわれ教員は右往左往しながら、目
の前のジヨブをこなすことに追われてい
ましたが、生徒は、何か役に立てること
はないかという純粹な気持ちで行動して
いました。レベルが一段高いところにある
と感じていました」

ボランティアだけではない。生徒はそ
れぞれの立場で役割を果たそうとして
いた。校内新聞「梅章」の斎藤君は言う。
「震災の1週間後くらいから委員とメー
ルでやりとりしていました。休みの間も
できることはある。近所の避難所を訪れ
たりして、記事をあたためておき、学校
が再開したときに備えようって」

1898年の創立以来、同校は「清ら
かであれ、勉勵せよ、世のためたれ」を校
是としてきた。入り口の学生像には、校
歌の一節「花咲きみのりて世の為立たむ」
と刻まれている。その精神に違わず、困
難ななかにあっても、するべきことを真
剣に考え、世のために行動した生徒たち
のことを浜田は誇りに感じた。

おりしも多数の生徒が学校に駆けつけ
た4月12日は、大幅に規模を縮小して実
施された東京大学の入学式。福高を卒
業したばかりの森谷浩幸君が総代とし

対して「スクリーニングを受けていなか
れば中に入れません。申し訳ないですが被
ばく検査後においでいただけませんか」
と説明し、ひきとつてもらおうといったつら
い役回りも、当初はあったという。

放射線、放射性物質という得体のしれ
ないものを相手にする緊張感は、想像を
超えたものがある。浜田は、3月19日付
けで知人にこんなメールを送っていた。

「今、福島の人々は支援や仕事を続けな
がら、このままとどまってよいのか、現場
を離れ、避難してよいのかという葛藤を
胸の中で押し殺しています。避難する人
も増えるなか、残っている者の葛藤は日
ましに大きくなります」

つけ加えるように、物理の原も言う。
「葛藤は全教職員にあったと思います。
ただ、私たちも公務員ですから、避難し

てきた人がいるのに自分らが現場を離れ
ていいのかという気持ちはありました」

朝の打ち合せで富田昭夫校長から発
せられた、「もし今後、新たな爆発が起こ
り、急を要する事態が生じたら、皆さん
と皆さんの家族を優先に考えて行動し
てください」という言葉は、ありがたいと
同時に、緊迫の度合いを高めた。

花咲きみのりて世の為立たむ

その避難所も4月11日には閉鎖され、
翌12・13日には立ち入り禁止となってい
た3・4棟から物品を運び出すなど、教
室の入れ替え作業が行われた。その際、
学校のホームページを通じて生徒に手伝
いを呼びかけたところ200人近くが集
まった。生徒数は新2・3年生あわせて6

40人弱だから相当な数だ。生徒会の
阿部真悠さん(2年)は、「やはりみんな
学校が好きだし、早く学校に戻りたいん
だなと感じました」と、当時を思い出す。
そして、4月18日に始業式が、翌19日
には入学式が執り行われた。

「器が大勢の生徒でいっぱいになると、や
はり雰囲気が違うんです。当たり前のご
とですが、学校というのは生徒なのだ
とつくづく思いました(浜田)

浜田は生徒との対話をよくこんだ。
「休みの間、各クラスで10人前後はボラ
ンティアに参加していたようです。放射
線のリスクもあり、簡単な決断ではな
かったと思いますが、子どもたちやそれ
を認めた保護者の方々に尊敬しました」

実は学校が避難所となっていたとき
も、多くの生徒から手伝いの申し出があ

壇上に立ち、「日本は今、大きな国難に直面している。将来、社会に貢献できるよう努力を怠らず有意義な学生生活を送ることを誓います」とあいさつしていた。

浜田は、福高に赴任した1年ほど前のことを思い出した。

「前任校での最後の2年、進路指導主事として県内外の多くの先生方に出会い、話を聞くようになり、大学に入れるだけでは駄目だ。その先も見据えた指導をしなくては、という気持ちが強くなっていました。その先とは何かといえば、どのように社会とかわつていくか、そこで自分の力をどう役立てるかということです。そんなおり福高に異動し、『花咲きみのりて世の為立たむ』の文言と出合ったことは運命的でした。梅の花が咲いて終わりではなく、その後実をつけることで人々の役に立つように、大学に合格して終わりではなく、社会のために力を生かす。そうした人を育てることが、ここでの私の使命だと感じたことを覚えています」

その点、浜田が心配したのは、そうした校風になじむ間もないまま、苦労を強いられることになった新入生だ。彼らは仮設校舎が完成する夏まで、80人を1クラスに、第2体育館、視聴覚室、同窓会館を教室代わりにしなければいけなかった。特に体育館は音が響き、体調を崩す生徒もいた。保護者からは不安や要望の

声が出たが、1学年の教員は「福高にはこうしたときでも頑張れる生徒が集まっています。信頼してほしい」と理解を求めた。その分、教育の質を落とすわけにいかないというのが教員の共通の思いとなった。進路指導部長の神田も言う。

「学習環境は間違いなく悪くなっています。そうした状況でも、二人ひとりの高い進学希望を実現しないとけません。こういうときだから、負けずに立ち向かうという意識が校内で高まりました」

福高グラウンドスキャン作戦

ただ、いくら生徒や教員が頑張っても、放射線に関しては気持ちのもちょうどでうにかなる問題ではない。学校としては生徒の安全を第一に考える必要があった。

できることからやる。 不満や愚痴は 力にならない



4月13日に県が実施した環境放射線モニタリング調査によれば、福高校庭の放射線量は、地上1センチメートルで $3.6\mu\text{Sv/h}$ （マイクロシーベルト）、同1メートルで $3.1\mu\text{Sv/h}$ であった。これは文科省発表の屋外活動の制限値 $3.8\mu\text{Sv/h}$ を下回る。その限りでは、屋外での活動は制限なくできることになる。しかし、同校のSS且活動の中核を担うSS部の2年生が、県のホームページにも公開されていたこの数値に疑問を呈した。原は言う。

「授業前の雑談で『これで部活動ができるな』などと話していたとき、『その数値は誰が、どこを、どのように測ったのですか。1カ所だけ測り、安全ならいいのですか』と迫ってきたのです。それは正しい疑問でした。私でさえどう測定されたか知らされていなかったのですから」

それがきっかけとなり5月2日、SS部の生徒や教員らが40台の線量計を使い、敷地内の660地点を計測する「福高グラウンドスキャン作戦」が実施された。すると、予想どおり地形や水はけなどによって値に差がでることを確認。おおむね $3\mu\text{Sv/h}$ 程度だったがセカンドベース付近では $5.3\mu\text{Sv/h}$ を計測。体育館脇の側溝にいたっては、後日の測定により最大 $60\mu\text{Sv/h}$ という非常に高い値を示し、立ち入り禁止および除染の措置がとられた。

これにとどまらず、SS部における放射線の生徒らは原らの指導のもと、高層マンションや近隣の山での測定を続けたほか、放射線の遮断実験などを行った。

浜田は、こうした活動に参加したわけではないが、感じることは多かった。「生徒ながらたくましさを感じまし



「何がしたいのか」から 「何をすべきか」、 「何ができるか」へ

線の影響についてはさまざまな考え方があり、これから話すことも絶対ではない」と前置きをしたうえで各教員が語るというスタイルをとりました。生徒にとっては、情報を受け、自分自身で考え、判断する力が必要になるわけで、進路指導的にもいい機会だと思いました(浜田)

夏になると震災関連の工事が本格化。7月21日から8月10日にかけてグラウンドの表土除去が行われ、8月5日には1・2年生用の仮設校舎が完了に完成した。

課外活動も活発になった。前述の阿部翔太君は7月21日から8月5日まで「UK-Japan Young Scientist Workshop」に参加。ケンブリッジ大学教授の指導のもと、現地高校生と天文学や放射線などのテーマ別に研究を行った。共に参加した二人の2年生はこう感想を残している。

「現地での原発の議論は冷静でした。正しい情報は入りにくいものの情報を取捨選択する余裕があるように感じました」
「私は文系ですが、文理に関係なくいろいろな観点から物事をとらえる重要性を実感しました」(以上、宮川将「朗君」)

「現地の高校生は地震のメカニズムしか学んでいないようでしたが、日本では被害や対策まで学ぶ点で日本の地学のレベルの高さを実感することができました」
「イギリス人のルームメイトから『災害に苦しんだ君に少しでも合わせたい。日

た。自分たちのまわりで起こっている問題に対して、自分たちのこととして受け止め、それを解決するために行動できることはすばらしいことだと思います」

こうした活動は反響を呼び、新聞各紙で紹介された。もちろん校内新聞『梅章』でも詳報された。斎藤君は「福高の実情をみんなにわかりやすく伝えることがぼくたちの仕事ですから」と、さらにと言う。

その『梅章』の7月1日付け号外には「梅苑祭に代わる新行事 準備進む福高祭」なる記事が掲載されている。福高の文化祭は演劇などが盛んだが、安全面の配慮からクラス発表と一般公開が中止となった。その代替として7月22・25日に福高祭(リヴァイヴァルフェスタ)が実施されたのだ。後期生徒会役員選挙で会長

に信任された阿部真悠さんは言う。

「震災で制約があるなか、さまざまな行事をできるだけ例年どおり実施しているというのが生徒会の考えです。福高祭の実施にあたっては、学校の意見と生徒の要望の間をとりもつことに苦労しましたが、最終的には『良かったよ』という声を多くいただき、ほっとしています」

英国研修とSSH全国発表

7月26日には、体育館で全校生徒を前に、地学、物理、生物など理科教員がそれぞれの立場や思いから、放射線や身体への影響について話す特別授業が開催された。「福島の学校でありながら、放射線を授業で扱わなくていいものか」という理科教員の提案により、総合的な学習の時間に

実施されたものだ。扱うテーマがテーマだけに、当初は外部講師を招き、客観的な事実を語ってもらうという案もあった。「けれど、自分の科目に関することは直接自分の口で伝えたいという意見が多数を占めました。私も、『総合学習の意義はそうした科目を超える点にあり、外部講師に任せるのではもったいない』と意見を述べました」と総合学習委員でもある浜田は言う。

どこまで踏み込むかも議論になった。「放射線の影響については何が正しいかわれわれにもよくわかりません。そのため、個人的な思いが先行しすぎてはいけないという意見と、教科書的な知識を伝えるだけならわざわざ生徒を集めて話す必要はない、主観をまじえなければ意味がないという意見です。結局、『放射

本の部屋のようにぼくは靴を脱いで過ぐすから雄大もラクにして』と言われ、感銘を受けました」(以上、佐藤雄大君)

8月11・12日には、全国のSSHの代表が集う「SSH生徒研究発表会」が神戸で開かれた。当初は阿部君らが参加を予定していたが英国研修のため断念。急きよ2年生の放射線計測グループが「福島高等学校の放射線の状況」というタイトルでポスター発表を行うことになった。「連の流れを原は次のようにふりかえる。

「阿部君の代わりに彼らが発表することになったとき、私の立場としては、なんとか彼らにデータをまとめてもらい、発表に間に合わせなければと内心焦っていたわけです。けれど、発表を無事に終え、『収集したデータをこうやって公開することが社会に役立つことになると思っています』と、インタビューにこたえている彼らを見て、私は頭が下がる思いでした。単なる自然科学的な興味や関心を超え、社会的な意義を見いだして活動していたからです」

進路指導部の取り組み

SSHや総合学習と連携をとりながら、進路指導部でもさまざまな取り組みを実施した。大学訪問やオープンキャンパスでは、生徒はやはり震災や放射線、復興

に関連した研究に刺激を受けたようだ。

「今の段階では、例えば汚染された土壌を再生しようと思っても、高校生にそれはできません。けれど、大学で学ぶことによつてそれが可能になるかもしれないと実感できたはず。大学とは、将来やりたいことと、それができない今の自分との溝を埋めるための場であることを自覚できたと思います」(浜田)

「職業観育成講話」「最先端研究者講演会」では、医科大学の学長や宇宙物理学の専門家などを招いた。こうした講話では、文系・理系志望の生徒を問わず質問がとぎれない。なかには「福島に住み、これまで原発を容認してきた私にも責任があるのでは？」という発言もあった。「そうした、内から湧き上がってくるような、伝えたいとか、聞きたいという気持ち、問題意識が生徒のなかに醸成されているのを感じています」(浜田)

例年なら後期に実施していたような企画も、前倒ししたり拡充したりしている。「これまでは、自己実現、自己の充実感みたいなところが進路選択の大きな基準でしたが、震災以降、それをいかに社会に結びつけていくかという視点が強くなった気がします。こういう自分になりたい、そして少しでも社会とかかわってきたいと、ある程度明確になれば、そこへ向かうための学びを意識するはず。す

そうした空気ができているのだから、機会を逃したくありませんでした」(浜田) 自分は何がしたいのかと問うところから始まるが多かった今までの進路指導が、自分は何をすべきか、何ができるのかという価値観に変わり始めていることに、浜田は手ごたえを感じている。

福島第二原発から63キロメートル離れている福高は今、いつけんすると普通に学校運営がなされている。実害という点では沿岸部の学校の比ではないが、だからこそ困難を抱えているともいえる。

「日々を普通に過ごしながら、しかし、何十年後にあらわれるかもしれないリスクに不安を抱えて教育活動をしていかねばなりません。それはまたべつの困難さがある気がしています。本校より大変な学校はたくさんあり、わかったような発言は厳禁だと自分に言い聞かせていますが、いっぽうで遠慮した物言いをしていると、自分たちの問題として震災や原発について語れないわけで、自分の立場から積極的に発信するべきだとも思っています」(浜田) その点、生徒の発言はスト

レートだ。

「風評被害は深刻ですが、人の心がかかわるだけに簡単に解決するとは思えません。ぼくは福島の発展を風評被害の解決からではなく、別の観点から模索したい。志望が経済から法学系に変わってきただのも、国の代表として働きたい気持ちが強くなってきたからです」(佐藤雄大君) 「この経験を生かそうとする人が福島には大勢います。自分は次世代エネルギーとしての核融合発電の研究を進めるつもりです。まずは福島がしっかりする。それが、他の被災地の復興にもつながると思っています」(阿部翔太君)

